

保育の体験と思索

—子どもの世界の探究—(十七)

津 守 真

四歳の二学期、秋も深くなるころ、幼稚園の子どもに接して顕著なことは、子ども同士で遊ぶことに何よりも楽しさを見出し、いるらしい姿である。数人でかたまりになって走りまわり、私の傍をすつと通り過ぎてゆく。また、三、四人肩を組んで便所からもどつてくる。砂を掘りながらも、互いの会話がはずむ。そんなとき、私は子どもに近づくと楽しさをこわすみたいなおそれを感じて、声をかけることもできない。時たま、そういう仲間にいれてもらったときには、その楽しさを維持するのに、とてもエネルギーを使う。こちらが先に立って、楽しさを作り出し、皆がもつと面白くなるようにと考えることもある。

面白く遊ぶこと——先に立ってゆくこと

十月二十五日

朝、庭でNが近寄ってきた。すぐに藤棚の下にいたMくんがかけてこしようと言うので、三人で花壇をまわって走った。それから、はさみおにしようといわれて、私も加わった。滑り台の上にいるとつかまらならしいが、私に限っては、滑り台の上でもつかまると鬼になる。そのうちに遊戯室のわきの木も障地にな

って、それに足がついていればつかまらない。みんな滑り台と木との間を、何度も走って往復する。私もわざと木から離れて走ったり、子どもをつかまえようとしていろいろしゃべりながら走ったり、この人たちと面白く過そうと思って夢中であった。かなりエネルギーを使い、へとへとになった。そのうちにボールをぶつけるとつかまることになる。しばらくしている間に、Sh、S、その他、年長組の子どもが二、三名加わる。

この日、私は、夢中になって鬼ごっこをする子どもたちが、もっと活気が出て意気が上るようにと、いろいろ提案したり、スリルを作り出したり、かなり先に立って遊ぶことが多かった。それでは身も気も使ってかなり疲れたけれども、面白かった。

おとなの方も気をひき立て、子どもたちの先に立って変化をつけ、活気づけてゆくことは、時によって必要であると思う。また、全体としてみると、『育ての心』の中の「小さな太陽」にも記されているように、明るさと励みを与える存在となるように、保育者は、子どもの中にはいるときに自分の気を引き立てること、心をかけるのがよいと私は思っている。私自身の保育の体験の中でも、ことに家庭保育においては、保育が日常事に流れておとな

の感情がそのまま出やすいので、自分自身で気を引き立てることがよい結果をもたらしたことがしばしばあったと思う。子どもから見て、保育者がつまらなそうで、意気消沈していたのでは、子どもはそこで張り切って生きてゆく気を起さないだろう。そういう点で、保育者は、子どもたちが生きる気力をもつことができるように、自分自身に対して客観的になることをつとめるのがよいと思う。もちろん、これには限度のあることであって、とくに長時間子どもと生活を共にする保育者にとっては、それがむづかしくなる時があるのも当然である。

ところが、活気を与えようという気持が先に立ちすぎると、おとなだけが張り切って、子どもの生活とくい違ってしまふ。

十月二十七日

愛育の知恵おくれの幼児のグループで。母親のところにいきたくなったRの手をひいて、私はRが面白くなるように元気づけながら、滑り台をやろうと言って、滑り台の階段をのぼる。傍にいた他の子どもも誘って、賑やかに階段をのぼる。私が先頭に滑る。下の方で手をのばしてトンネルのようにしてくれる子どももいる。何回もくり返して、階段をのぼり滑り台をすべりおろす。そのうちに、さらに二、三の子どもが加わり、数名でつながって

すべる。私としては、面白く皆の気持を引き立てるのに一生けんめいになった感じである。この日は全体に、私はこういう自分自身の感じで動いていたが、この滑り台の場面が最頂点で、あとはばらばらになって、ひとりひとりの子どもがめいめい何かして遊んでいた。そういうときには、賑やかに子どもに近づくとがためらわれ、迷う場面がいくつもあった。

知恵おくれの子どものグループでも、二期期の終りころになると、自然に二、三人が寄り集まることが見られるようになり、おとなが一緒にはいると、数名の子どもが一緒に太鼓橋の上に坐ったり、同じ場所で何かをしていたりする。この滑り台の場面でも、おとなが先に立って、誘ったり面白くしたりしたので、何人もの子どもが一緒にいる面白さを体験することができたと思う。そしてひとしきり賑やかにしたあと、次の瞬間に、それは崩れて、めいめいが自分の遊びをはじめたのを見ると、それには、おとなが先に立って活気を与えたのが役立っていたのだと思う。こうして一緒に遊んでいた子どもたちが散らばって一人ずつになると、だれか一人の子どもの傍に行くことはこちらの勝手なような気がして、面白いことをやっているのに、近寄ってゆくことはた

めらわれてしまう。ひとりひとりが、自分の遊びをして満足しているときには、そこで何が行なわれているのかは分からなくても、その調和をくずさないように片隅に身をおいていればよいのだろうと思う。

十二月一日

知恵おくれの幼児のグループで、近ごろは何人かの子どもと一緒にいられることが多いので、私は先に立って遊び、活気づくようにつとめた。しかし、落着いた遊びができず、何か子どもとくい違う気持が残った。こういうときには、子どもが何をしていたのかも、自分が何をしたのかも記憶に残らない。自分が先に立って活気づくようにつとめただけであって、だれがきてもいいように心を開いた状態ではなかった。こういう日の保育は、保育と言うには価しないものだったという気持が残る。

おとなが先に立ってゆくときには、おとなの考えを進めて、自分が面白くすることが主になることがある。自分が楽しく時を過せるというのは、保育のたいせつな要素であると思うが、そのおとなの世界には、自ら動く子どもの空間がふくまれていなければ

ならないのだと思う。この日には、レールをつなげて汽車を走らせるときにも、私の考えだけで次々に複雑につなげていたのではないかと思う。また、子どもが近寄ってきたとき、私が先に何かをしはじめることが多かった。保育を終って、私は子どもに対して心が開かれていなかったことを強く感じた。そして、次にこの子どもたちとふれるときには、だれがきても私に近づくと (available) ことができるように、自分の心を開いた状態にしておこうと思った。これは先に立つよりも、後からついてゆく心の構えである。

後からついてゆくこと

十二月八日 知恵おくれの幼児のグループで

きょうは、私は玩具も出さず、だれでも近づける (available) な状態に自分の身をおこうと思って保育室に出た。

S がくる。私は床に腰を下して、しばらく無言でゆっくりとSの傍にいる。(Sはレールと汽車が好きだから、いままでだと、私はすぐにレールを出して、どんどんつなげて長くしてゆくのがある) 今日、Sはしばらく私のまわりでうろうろしてから、レールをいれた籠に手をふれ、おろしてくれというように私に身ぶ

りで示す。私が籠を棚からおろすと、レールを二つとり出して私の顔をみるので、私はその二本をつなげると半円形ができる。そうするとSは、さらにレールを二本とり出して、丁度、円になるようにはめる。レールが四本で円形ができる。(今まで、こんなに小さなレールの道を作ったことはめったにない) Sがつなげたレールの部分は、大体はまっているが、完全にははまっていないので、汽車を走らせると、つなぎめでガタンガタンと音を立てて走る。Sは床にねそべり、床に耳をつけてその音をきく。私も同じように耳を床につけてみると、ガタンガタンと規則的に音をたて、本当の汽車が走っているみたいなきこえる。他の子どもがきて、レールが一部分こわれ、私が直すとSもレールをつなぎ直す。Sは更にレールを足して、8字型につくる。私はSが自分でおんな形にレールをつなぐことに驚いた。Sは長い間、私の傍で汽車を動かしていたが、つと立上って庭に出ていった。この日はその後、Sはときどき私のところに来て、にっこり笑って立去る。この日のレール遊びは、いつもほど大じかけでないが、Sにとっては、自分でやったという実感があつたと思う。

この日、私は子どもの後からついてゆく心の構えであった。子

どもより先に手を出さず、子どものやりはじめることを傍で見とどけて助けるようにした。子どもと私との間はゆっくりと動いていた。そして、私は子どもがこんなこともできるのかということを見つけて驚いた。ここに掲げた例だけではなく、他にも同様の発見があり、私は満足して一日を過ぎた。多勢の子どもが私のまわりに集まることはなかったけれども、私の近くにきた子どもは満足しただろうと思う。そして、気がつくと、私が直接ふれないうところで、二、三人集まって何かしている光景が目についた。

子どもの中に動いているものを感じるゆとりがおとなの側にあるときには、その子どもは、その人と共にいることよって成長することのできたときではなからうか。そのときには、おとなも、一段と人間についての理解が増して、成長するときのように思う。単にその場を収さめるために行動したときには、子どももおとなも成長していかないのではないかと思う。

先に立ってゆくことと、後から

ついてゆくことと

人の先に立ってゆくときには、未来に向ってふくらむ豊富なイメージがなければならぬ。それが子どもと関連しているときには、とくに、おとなの予定や段取りだけがあっても、子どもにと

っては自分自身の未来は開けてこない。子どもをひきつけるに足る豊富なイメージがおとなの側に生れるのは、おとなにとって簡単なことではなく、相当長期間にわたって、自分の中で温めていることが必要なこともあるし、また、かなり研究をつんでおくことが必要な場合も多い。

子どもが自分から何かを始めるときには、子ども自身が何かをやろうという気を起しているときであり、子どもの側に、未来に開けたイメージが生れているときである。子どもの生活範囲は限られているから、具体的な活動としては、あたりまえの小さなことに見える場合が多いが、子どもの世界の中では、大きくふくらんだ広い空間を占めている。自分の手でレールをとり出したとき、子どもの耳には、ガタンゴトンと走る汽車の音がすでに聞えていたかもしれない。そのとき、おとながレールを長くしてやる必要はなかったのであって、四本のレールが拙くつなげられた上を走る汽車の音を、床に耳をつけて聞くのでよかったのである。おとなが先に立って面白くするよりも、子どもがすることの後についていて、子どももっているイメージに共感することの方が、子どもにとって満足のゆくことだったに違いない。こうして、子どもの後について、ゆっくりと動いたときに、おとなはこの子どもの世界に一步近づけることができるといえる。そして子ど

もおとなから理解されたと感じ、落着いて自分の道を追求することができた。

フレーベルが、「教育は、必然的に受動的であり追隨的であり」「決して命令的な断定的な干渉的なものであってはならない」というとき、おとなにとっては、子どもの後からついてゆくことの方が基本的な心の構えであることを言っているのであろうと思う。

四歳の二学期に、友だち同士の遊びが面白くなるとき、おとなもまた、子どもと面白く交わることを要求される場合がしばしば起ることを述べた。しかし、いつもそうであるのではなくて、子どもの後からついていって、ゆっくりとつき合うことがその根底になければならないことを述べた。私はこのように考えるのであるけれども、そのいずれにより重点をおくかということは、人によって異なるのであると思う。教育は、ある特定のおとな「その人」と、この特定の子どもの間の交りの中に成立するものである。かならずこうせねばならないというような一般原理に従って行なうものではないと思う。おとなもその生涯のあるときに、子どもの生活に出合って、そこで自分自身の過去・現在・未来にわたる反省的思考の総力をもってこれに応答するのであって、安易にある規準に従って行動してすむことではない。子どもの前に

出るとき、おとなはいつもくり返し、自分自身の「人間」に立ち返ることを要求されるのであると思う。

秋の一日、幼稚園で、私はKともう一人の子どもの後を追って山にいった。Kは、長い間友だちと円滑に遊べなかったが、四歳の秋から、子ども同士で遊ぶことが面白くてたまらなくなった子どもである。Kは山からおりて、園庭のベンチに坐る。私も少し離れたところに腰をおろした。Kは二、三人の男児と何かしきりにしゃべっている。こうして離れてベンチに坐っていると、この子たちが、これからどちらの方に向かって歩いてゆこうと、私が立ち入ることではなくて、この子たちの自由だという感が伝わってくる。秋の陽の中のゆっくりとした時のひとこまである。

そして私はいろいろと考えさせられる。多くのものに縛られたおとなの世界の中で考えるよりも、子どもはもっと自由である。自分自身をどちらの方向に伸ばしてゆかについても、おとなの考えの外に、子どもの自由な可能性がある。おとなはおとなとしての考えを述べるが、それは子どもが自分の道を選んでゆく上の一つの可能性としてあるにすぎない。子どもの中に、自分で抱負をもって何かしようとする心を育てることがたいせつなのだと思う。

(つづく)